中学校
国語
指導資料

漢字・語句の復習をしよう

漢字・語彙の指導については、社会生活や他教科等の学習における使用や、読書活動の充実に資するため、中学校３年間を通して常用漢字の大体を読めるようにするとともに、学年別漢字配当表に配当された漢字を使い慣れるようにする必要があります。漢字を読む能力としては、漢字一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文書の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことができるようにすることが求められます。そのため、教科書を読むことや読書を通して、漢字の読みの習熟と応用を図ることが大切です。

ワークシート活用場面例

第１学年（５月）
「漢字の組立てと部首」
（光村図書　Ｐ78～）

第２学年（５月）
「熟語の構成」
（光村図書　Ｐ74～）

第３学年（５月）
「熟語の読み方」
（光村図書　Ｐ78～）

第１学年（10月）
「漢字の音訓」
（光村図書　Ｐ133～）

第２学年（10月）
「同じ訓・同じ音をもつ漢字」
（光村図書　Ｐ128～）

第３学年（10月）
「漢字の造語力」
（光村図書　Ｐ129～）

第１学年（１月）
「漢字の成り立ち」
（光村図書　Ｐ222～）

第２学年（２月）
「送り仮名」
（光村図書　Ｐ226～）

第３学年（２月）
「漢字のまとめ」
（光村図書　Ｐ207～）

ポイント

字形と音訓、意味と用法、語の成り立ち、熟語などについて必要に応じて指導し、例えば漢字の構成要素である「へん」や「つくり」などに注目して、読みを類推することができるように指導することも大切です。

第１学年（７月）
「言葉のまとまりを考えよう」
（光村図書　Ｐ41～）

第２学年（７月）
「単語をどう分ける？」
（光村図書　Ｐ39～）

第３学年（７月）
「すいかは幾つ必要？」
（光村図書　Ｐ39～）

第１学年（12月）
「言葉の関係を考えよう」
（光村図書　Ｐ188～）

第２学年（12月）
「走る。走らない。走ろうよ。」
（光村図書　Ｐ178～）

第３学年（12月）
「「ない」の違いがわからない？」
（光村図書　Ｐ180～）

第１学年（２月）
「単語の性質を見つけよう」
（光村図書　Ｐ229～）

第２学年（１月）
「一字違いで大違い」
（光村図書　Ｐ211～）

ポイント

主語、述語、修飾語などの並ぶ順序や、主語と述語の照応、修飾語と被修飾語の照応などについて理解を深めるとともに、語順や語の照応によって表現がどのように変わってくるかを様々な文型について考えさせ、文の成分の順序や照応に関心をもたせることが大切です。

第１学年（10月）
「いにしえの心に触れる」
（光村図書　Ｐ139～）

第２学年（10月）
「いにしえの心を訪ねる」
（光村図書　Ｐ131～）

第３学年（10月）
「いにしえの心と語らう」
（光村図書　Ｐ133～）

小学校での学習を踏まえ、中学校においても引き続き「古典に親しむ」ことを重視し、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりしていきましょう。
ワークシートは、学習したことの確認として活用することができます。

ポイント

歴史的仮名遣いなどの文語のきまりについては、生徒の興味・関心を大切にしながら、教材に即して指導したり、必要があれば取り立てて指導したりすることが大切です。古典を取り上げる際には、繰り返し音読して、生徒自ら古典特有のリズムに気付くことを重視し、五音、七音の繰り返しなどの特徴について理解を深める必要があります。

A　話すこと・聞くこと
B　書くこと
どの言葉を用いるとより効果があるのかを吟味する。

C　読むこと
表現されている語句に着目して、その意味や働きを考える。

教科書で学んだ漢字について別の音訓を確認したり、学んだ語句の類義語や対義語を学んだりすると、理解がより深まります。言葉による見方・考え方を働かせることが大切になります。ワークシートは学習したことの確認として活用できます。

ポイント

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕（１）に示された「ア　伝統的な言語文化に関する事項」、「イ　言葉の特徴やきまりに関する事項」、「ウ　漢字に関する事項」については、「A　話すこと・聞くこと」、「B　書くこと」、「C　読むこと」の指導を通して、それぞれの事項について指導することが大切です。